

The Mountain of Father's Love

板東 浩

日曜の朝 井村幸男先生を偲びながら、この原稿を書いていたとき、不思議なタイミングで、お鯉さんこと、多田小餘綾（ただ・こゆるぎ）さんの計報が飛び込んできた。平成二十年四月六日、眉山が満開の花で咲き誇る中、「徳島の大桜」は先に散ってしまった。

私は、徳島の芸術文化について、県外で紹介させていただく機会が多い。映像と音楽を用いた講演で、みなさまに喜んでいただくために解説するのは「阿波踊り」。音楽であり、踊りであり、スピリットの発揚でもある。つまり、いま注目されている統合医療の立場から、極めつけの音楽療法＋運動療法と言えよう。心身に対する健康の維持増進にピッタリだ。

その際に、いつも解説させていただくのは、井村先生が著された「随想写真阿波踊り：踊り踊らば」(徳島県教育印刷、2005)である。表紙は粹でファンタジスティックな雰囲気。そして、先生の文章は三味線の撥さばきのごとく、リズムカルで小気味がよい。

さて、その直前に、私は国際学会に出張していた。最近、中東で人気があるスポットに、ドバイがある。ドバイとは国名ではなく、アラブ首長国連邦(United Arab Emirates, UAE)に含まれる七つの首長国(Emirate)の一つ。そして、政府がバックアップしているのがエミレーツ航空で、全世界中の都市と結び、ドバイ空港が世界のハブ空港となっている。

そのエミレーツ航空に搭乗し、関西空港から飛び立った。格安航空券なので、席はエグゼクティブではなく、当然ながらエコノミークラス。にもかかわらず、席に座ると、目の前に10インチ程度の画面があり、自由に映像チャンネルを選択できる。驚くことに、セレクト可能な映画の種類がなんと六百以上。さらに on demand なので、映画の最初からでも途中からでも、まったく思いのまま。いずれも数カ国語の字幕がついており、寝る暇がないほどである。

World cinema のジャンルを検索していると、徳島が舞台となり全国で封切られた「眉山」を見つけた。英語名では「Japanese-Bizan: The Mountain of Mother's Love」とある。なるほど、「母の愛の山」というタイトルになっているのか。

最初の画面には、英語であらすじが記されている。「母親が病気との連絡を受け、娘は生まれ故郷に帰る、to uncover a hidden secret」と。英文の箇所を、意図的に2つのパターンで訳してみよう。悪い例は「隠蔽されていた秘密を暴露するために、徳島に帰った」であり、適切な訳は「帰徳したところ、いままで伏されていた秘密が明らかに」となる。大切に心の中で育んできたものの、カバーを取り払ってしまうというニュアンスなのだろうか。なんともしっくりこない。和訳や英訳とは、本当に難しいものだ。

映画の音声は日本語で、字幕は英語で見ながら観賞することに。いろいろな場面で、英語的な表現に触れることができ、いい勉強になった。しかし、日本語における感情の揺れや心の機微をうまく英訳するのは、至難の業であるまいか。

徳島の文学をリードしながら、後進を育ててこられた井村先生によって、「随筆とくしま」が開花したといえよう。頼りない雛(ひよこ)である小生にお声をかけていただき、いろいろと面倒をみていただいた。総会のときにトピックスをお話させていただく貴重な機会も賜わるなど、心から御礼を申しあげたい。私が先生の恩に報いることができるのであれば、従来の活動を続けること。機会があれば、井村先生の Paternalism (父親的温情主義)あるいは Father's Love をたくさんの方々に伝えていくことだろうか、と考えているところである。